



TESTAMENT

booklet note

Japanese

SBT2 1481

ふたつの星、エフゲニー・スヴェトラーノフとベルリン・フィルの唯一の遭遇

エフゲニー・スヴェトラーノフ (1928-2002) はソ連邦で最も有名な指揮者である。1928 年モスクワ生まれ。女優と歌手の間に誕生した。当初、俳優として劇場でのキャリアを目指していたが、音楽への情熱がこれを上回り、1951 年までモスクワのグネーシン音楽院で作曲とピアノを学ぶ。その後、モスクワ音楽院で作曲とピアノに加え指揮法を学んだ。卒業後すぐボリショイ劇場に職を得、最初はアシスタントとして、後に首席指揮者となる。1965 年、コンスタンティン・イワノフの後任としてソヴィエト国立交響楽団 (1936 年創立) の首席指揮者となる。この地位はソ連楽壇で最高のポジションであり、スヴェトラーノフはこのポジションを 2000 年まで務めた。このオケと西側諸国へのツアーも実施している。さらに、ロンドン交響楽団やハーグ・レジデンティ管弦楽団などにも客演している。

スヴェトラーノフは古典やロシアのロマン派交響曲の指揮者として有名ではあるが、現代音楽にも情熱を注いでいた。作曲家としては、セルゲイ・プロコフィエフやドミトリー・ショスタコーヴィチより寧ろ、ニコライ・ミャスコフスキーやセルゲイ・ラフマニノフを好んだ。ヴィルヘルム・フルトヴェングラー同様、いつも自身を作曲家として認識しており、‘単なる’指揮者として有名になることにいらだちを感じていた。作品は、管弦楽作品 (交響曲、狂詩曲、ピアノ協奏曲、交響詩)、室内楽曲 (ソナタ、弦楽四重奏曲、木管五重奏曲) そして、ピアノと声楽のための音楽にまで及ぶ。

この指揮者のディスコグラフィは広範囲に及ぶ。スヴェトラーノフはソヴィエト国立交響楽団と数えきれないほどの作品を演奏した。チャイコフスキーの交響曲全曲やニコライ・ミャスコフスキーの 27 の交響曲を含む管弦楽作品全般、他のオーケストラと録音も行ったグスタフ・マーラーの交響曲も含まれる。他のオーケストラとも多様な録音がある。だからこそ、スヴェトラーノフがベルリン・フィルとの共演を果たしたのがキャリアのかなり後半、60 代になってからだったのは驚きであり、その理由を説明することは難しい。この共演が実現した 1989

年はベルリン・フィルにとって非常に重要な年だった。ヘルベルト・フォン・カラヤンが辞任し夏には死去、次の首席指揮者にクラウディオ・アバドを指名。ジェームズ・レヴァインと初の東ベルリン公式訪問を果たし、ベルリンの壁崩壊後には、ダニエル・バレンボイムと旧東ドイツ市民のために感動的なコンサートを開いた。まさにこの年の3月、このロシア人指揮者も初めてフィルハーモニー・ザールを訪れた。そしてこれがベルリン・フィルとの唯一の共演となった。

スヴェトラノフはフィルハーモニー・ザールでの2夜のコンサートに古典派作品のプログラムを選んだ。前半はベートーヴェンのレオノーレ序曲第3番とハイドンの交響曲第100番ト長調《軍隊》、後半はいくぶんマイナーなチャイコフスキーのマンフレッド交響曲が演奏された。Tagesspiegel紙のヘルムート・コッツェンロイターが書いたように、スヴェトラノフはオーケストラに“型にはまることなくすべての奏者が強い責任感を持って演奏をしようとするモチベーションを与えることができる”指揮者であると述べている。ヴォルフ・ツューベはSpandauer Volksblatt紙でこの指揮者がハイドンの交響曲第100番の演奏上、特に時代の精神との調和において‘緊張緩和(デタント)’の方針を貫いたことに注目している。「非常にリラックスした演奏だった。オケのメンバーはそれぞれの持ち分を十分に果たした。トルコ軍楽部分は非常に控えめに演奏され、有名なトランペットによるファンファーレはまったく攻撃的ではなかった。サウンドは常に何か懐かしいものを感じさせ、《軍隊》という交響曲がまるで平和の讃歌かのように響いた。」

ロシアからのゲスト指揮者はマンフレッドをプログラムの中心に据えた。バイロン卿の劇詩に基づく4つの楽章で構成されこの交響曲を多くの指揮者は避けて通りがちだ。この風潮には伝統的理由がある。交響曲の構成上の問題とチャイコフスキー自身がこの作品に自信を持っていなかった点あげられる。この作品はチャイコフスキーのイニシアティブで創作されたものではなく、元々は作曲家仲間であったミリイ・バラキレフにバイロンを素材とするよう説得されて作曲に着手したものである。こうして、カール・シューマン曰く‘絶えず落ち着きがなく右往左往し、放浪癖と罪悪感の間を揺れ動く負のロマン主義的ファウスト博士’たるマンフレッドに翻弄されることになる。チャイコフスキーはバラキレフによって書かれた標題音楽的構想に難しさを感じており、“標題のない作品を書くほうが100倍好きだ”ともらしている。「標題音楽を作曲する際にはいつも、聴衆をだましていたような気分になるのです。本物の金貨ではなく無価値な紙でできたルーブルで支払っているような。」

チャイコフスキー自身のこの作品に対する評価はあいまいだ。友人のナジェンダ・フォン・メックに宛てた1886年3月13日(23日とする資料もある)の手紙には、最高の努力と奮闘をもって書き上げた自身の交響曲の中の最高傑作だと記している。一方、マックス・エルトマンズデルファーによるモスクワ初演の後には、“聴衆の反応は冷ややかで鑑賞に値しないという雰囲気だった”と感じたという。1888年には、ロシアの皇族コンスタンティンに宛てた手紙の中で、「マンフレッドはひどい作品です。第1楽章以外は大好きです。出版社の許可を得たら、他の3つの楽章を破棄するつもりです。どれも無価値で、特に最終楽章はひどい。この作品は

交響曲としては長すぎます。交響詩に書き換えるのが、マンフレッドが称賛される唯一の道だと考えています。」と述べている。

ともかく、スヴェトラノフのベルリン・フィルとのマンフレッド交響曲の演奏は大絶賛された。なにより、マンフレッドが価値ある作品であることを証明してみせた。熟成した他の作品と遜色ない作品であり、この作品の良さを引き出すには緻密な演奏が必要だと気付かせた。Tagesspiegel 紙のヘルムート・コッシェンロイサーはスヴェトラノフのマンフレッド交響曲に対する“情熱的な探究心”こそがコンサート会場に本物のセンセーションを巻き起こしたと分析している。「第1楽章でオーケストラが描き出したマンフレッドの‘狂おしい心の苦痛’の熱狂的ともいえる激しさは、一步間違えれば妄想の域に達するすさまじさだった。第2楽章はこの第1楽章との対比が効果的だった。チャイコフスキーは第2楽章で‘滝にかかる虹の中のアルプスの妖精’を描写しているが、演奏は静かで、実際にはほとんど聴こえないほどだった。音による絵画はヴァイオリンと木管楽器が描き出す、ささやき、水のしったり、穏やかな雨、笑い声で構成されており、リヒャルト・シュトラウスのアルプス交響曲における‘滝’の表現やメンデルスゾーンの《真夏の夜の夢》における妖精の世界を彷彿とさせる。続くのどかな田園的楽章は‘シンプルで質素な山に住む人々の自由な暮らし’を描写しているが、ベルリオーズを想像させずにはおかない。この楽章でオーケストラは巨大なパワーを必要とする最終楽章に先立ち、つかの間の休息を得ることができる。最終楽章は、地獄の狂乱の宴、最愛のアスターティの魂を呼び起こす呪文、ディエス・イレ(怒りの日)の恐怖を卓越したオーケストレーションで描きだした贖罪の歌などで構成され、スヴェトラノフはベルリン・フィルにフル・パワーの開示を駆り立てる。恐怖の場面において、明確な意図を持ってこれほどまでに強烈で演劇的な演出が加えられた演奏は非常に稀である。ホールにいた誰もが完全に圧倒されてしまった。演奏後の喝采もまた熱烈を極めた。」

おそらく、この作品の回帰的性格を強調するために、スヴェトラノフは敢えて作曲家の書き残したとおりに演奏しなかった。最終楽章は第1楽章から借用されたより意気揚々としたパッセージをもって締めくくられた。393小節以降は最終楽章の *Andante con duolo* に行かず、第1楽章の289小節、フォルティッシモへと続けた。加えて、スヴェトラノフは最終楽章の141小節から257小節を省略している。

スヴェトラノフの未亡人ニーナはこのベルリンでのコンサートについて次のように述懐している。「主人の唯一のベルリン・フィルとの共演にはかけがえのない価値があります。エフゲニーは自身のオケ、ロシア国立交響楽団(旧ソヴィエト国立交響楽団)とは何度もドイツを訪れていますが、バイエルン放送響、ハンブルク管、ケルン放送響やベルリン放送響などのドイツ・オケからの招聘はかたくなに拒み続けてきました。彼の考えは非常に明確で“ベルリン・フィルからの招待がないうちは、どこのオケにもいかない。”というものでした。実際どれも実現しませんでした。偉大なアーティストはそれぞれ自身の信念を持っているものです。誰も彼を納得させることができなかつたということです。」

「そして、ついに招待が来たのです。エフゲニーは特にチャイコフスキーのマンフレッドをプログラムとして選択することができ非常にうれしかったようです。海外ツアーの際は、エー

ジェントがチャイコフスキーの交響曲第4番、5番、6番の演奏を依頼してくるのが常でしたから。コンサートは大成功で聴衆からもオーケストラのメンバーからも拍手が鳴りやみませんでした。彼はとても幸せだったと思います。楽屋に戻ってからも挨拶にくる人すべてを温かく迎え入れていましたが、小声でわたしに“疲れ果てた。早くホテルに帰ろう。”と言ったのを覚えています。その後、楽屋のドアを閉め着替えを始めたところにノックの音がしました。ノックはしつこくてなかなか止まず、しょうがなくドアを開けたところベルリン・フィルのディレクターが立っていたのです。彼は放心しているようでした。コンサートのお客様がまだホールいっぱいに残っていてスタンディング・オベーションが続いていると言うのです。しかもまだまだ止みそうにないと。マエストロはすでに自身のコートに着替え手には傘まで持っていました。急いでステージに戻りました。お客様は立ち上がり歓声をあげました。そして終わりのない喝采で彼を迎えたのです。マエストロは深くお辞儀をし、腕を高くあげました。お客様を落ち着かせようとしたのです。ホールが静かになったところで、エフゲニーはドイツ語でこう言いました。“こんなに温かい歓迎を受けて本当に幸せです。生涯、今晚のことは忘れません”と。」

Helge Grunewald, 2013

訳：小林茂樹